

■2008年夏、いま、詩はどこにあるか？

りや血液型によって、ことばは怒りっぽいじいさんにもなるし、青白い顔をした少女にもなる。導火線のみじかい人間がけんめいに冷静さをたもとうとしている場面は一種滑稽さをともなっていておもしろいし、他人に興味のない人間が必死に誰かとつながろうと叫ぶ姿もまたうつくしいとおもう。どうやらまとまらないまま紙数が尽きそうだが、いま、ぼくにとつての詩は、リアリティという概念とは関わりなく、人間のもつ本質的な生々しさのなかへもう一度その触先をむけようとしているらしい。

負の体験と世界と

須永紀子

いま、詩はおそらく次のような書き手の作品のなかにあるのだろうと思います。・この時代に生きて、詩を書き、公開するということに自覚的である。・個人的な挫折や敗北の経験、自分にとって重要と思われるできごとを手放さず、それについて考えつづけている。・つねに世界に目を向けている。

・見る・ことは・知る・ことであり、さらに・思う・ことにつながっていきます。現在、あるいは過去の、集合体としての経験についても、チャンネルを合わせる必要があるでしょう。いま世界で起きているさまざまな問題について、いくつかの悲惨な戦争について、関係ないというのではなく、知ろうと努めること。それはおそらくそのまま詩になることはないけれど、何らかのかたちで、作品に組

み込まれていくことと思います。負の経験と、いまここにいる主体としてのわたし、そして世界。その回路を行き来しつづけることが必要なのではないでしょうか。

すぐれた詩の書き手は、現在を全身でキャッチしていると思います。何が起ころって・見る・こと・思う・ことをやめないでしょう。彼らのなかに、詩のいまと未来があると信じます。

釜ヶ崎・暴動の夏

上田假奈代

2008年6月15日の今日は釜ヶ崎暴動五日目。テレビなどではあまり報道されていないが、釜ヶ崎では投石、放火が起こり、何百人という機動隊が並び、まちは封鎖されている。ところどころむき出しになった地面。はがされたブロックが機動隊にぶつけられる。深夜3時をすぎた日もあった。すでに何十人も逮捕者、負傷者がでている。

釜ヶ崎暴動は15年ぶりだと聞く。見下されてきた釜ヶ崎の労働者たちの怒りが火種だと聞か、真相はわからない。そんなことは無関係にともかく夜になると、地域外から男たちがやってきて騒ぎはひどくなる。機動隊の盾のむこうは指揮官に従う若者であり、花火を放ち投石をしている若者と年頃もそう変わらないはずだ。

ここにあるのは、あらゆる気持ち。暴力のための暴力だ。放水車が水圧の水を飛ばし、人がぶつ

普遍的だと思われていた物語の解体が明らかとなり、小説はその姿を多様化・局所化させてゆく。文芸批評も、もはやどんな小説が書かれようがある程度の需要があるということを認識している。純文学はケータイ小説を無視できないし、キャラクター小説の支持者は私小説を無視できない。よくも悪くも相補的に自らの立ち位置を決定してゆく。

とりあえず文芸らしい詩はそのような言論空間にほぼ不在と言っている。いわゆる教養としての詩が失効したあと、文学の限られたジャンルとしか問題意識を共有できない状況に現代詩は自らを置いている。

詩は外需のほとんどない文芸だ。それはそれでかまわない。しかし、そのような消費に曝されないことに安住する言論の状況には違和感があった。詩はその不在、外部性を逆手にとるパルチザンでありえているか。詩のフィールドをもうすこしメタな視点で見なおしたいと思っている。

詩の出口

柴田千晶

ふと考えてみると、しばらく詩を書いていない。同人誌・No.1・15号・2006年5月発行・に・汐まねき・という長い散文詩を発表したのが最後だから、もう2年以上詩を書いていないことになる。その2年間で約600句、俳句を作っていた。

・あなあなあなたのセックスは、益

とぶ。

ここにはないのは、想像力だ。暴力のための暴力ではなにも解決しない。そもそも解決のために集まっているわけでもなさそう、いったい何なのか、と思う。そしてなぜ、このまちが暴動を引き受けなければならないのか。わからない。

騒ぎの片隅で、絵描きの友達が見えた。小さなスケッチブックに描き込んでいる。駆け寄ってのぞくと、暴動の様子を描いている。ハツとした。ここには石を投げ罵声をあげる以外の表現の仕方がなかったからだ。この光景を目にやきつけておこう。詩を書こう。この現実には無力で、そのなにもなさで書く。

詩を書き続けるまえに

タケイリエ

すべてがぬるいゼリーみたいな国では、人々の副業は評論家である・とうぜん私も。あたまのなかで世界を転がす愉しみが、ひとりこのように寂しく立ち続けるのだ。ほろんでしまった戦後に、神さまは降りることなくテレビに映る某という男の身体を借りて語り、男は人間の言葉に訳す。それをばくだいなお金に変換するばくだいな大人もいる。幼稚園児の夏の弁当に梅干しを入れる。味付け海苔でアンパンマンの顔など描いている場合ではないと思う。キャラクター弁当に労力を注ぐ愛情深い女と話をするとき、なにかが間違っていると思う違和感が、私をかきたてる。白飯に梅干しを埋める才

はともかく、どちらの立場につくにせよ、**停滞・**が忌むべきものであるという認識は共有されているようである。

・ここに歴史が停滞して頹廃に入りかけた時代に、すぐれた人が出る。漢の鄭玄、清の段玉裁、王念孫、日本の宣長、みなそうである。

中国文学者の吉川幸次郎が一九六二年に発表した・読書力について・という随筆の一節を引いてみた。吉川氏によれば言語を著者の心理に立ち入って把握する能力、すなわち、読書の学・の能力は、ゆっくりとした時代にこそ高まるのだという。もしも日本の詩の歴史に・停滞・の時間があったとして、果たして日本の詩の歩みをおおきな視野でふりかえる力に長けた人材がどれだけ生まれてきたのか。また、生み出しているほどの・停滞・だったのかどうか。詩の・停滞・について語る

とき、**停滞**・そのものの糾弾、あるいは**停滞**・というレッテルを貼ることに対する糾弾・よりも先に、詩にとって・停滞・とは何かを、本当に忌むべきものなのかというレベルから、はっきり質しておかねばなるまい。もしかしたら・停滞・こそがいまの詩に求められている、あるいは・停滞・の中にこそいまの詩のころぞすべきものは生きている、という結論さえ導きだせしてしまうかも知れない。

詩の強度を考える

ヤリタミサコ

・境界の意識・黙っていると自我が侵されてくるこの情報化社会において、自分と世間と、自分と他人との境界を確

マジナイをするとき、このような発想で書かれた詩ならばおそらく庶民にも食べられるとひらめく。わたしたちは芋や豆を食べ田畑を耕し子を孕みつづける一生が予定されていた。病におびえるその日暮らしのために、子を間引き、親を間引いて捨ててゆく一生とは、もはや関係なく生きていく。忙しいから・と言って、買ってきたものを堂々と食べる。そうやって稼いだ時間で詩を読み、詩を書くことは恥ずかしいと思う。詩を書く以前に、やつつけるべき日々のちいさな仕事が全員集合し、山になっている。子どもの弁当に梅干しを埋めるのも、その山のうちのひとつだ。そして、その梅干しが外注品・であることに後ろめたさを感じながら、日本の、女である自分は、詩を書き続ける。

詩界の外側で息をして

小林レント

一年ほど、詩誌や詩のウェブサイトを意識的に視野にいれずに暮らしていた。詩にまつわる言論内部での生活のなかで、詩人自身が詩を消化してゆく。そこに限定的に生じている言説にリアリティを感じられなくなり、浸りきっていた自分を洗いなおしたかった。そしてそういうメディアから離れて感じたのは、ほんとうにこちらから内部・に向かない限り、現代詩の状況なんてさっぱりわからないということだった。というわけで、現在わたしは自分の詩の姿以外をほとんど知らない。

固としておくことは困難。意識と無意識、社会と個人、自己、これらは対立概念ではなく相互に不連続する連続で、かつ包含関係でもある。曖昧にみえるが明確に認識される境界を意識すること。

・個人的なことは政治的・フェミニズムでは、個人を政治にせよ、と主張してきた。身体や感情、これらは個に回収されてはならない。家族内の力学も病理も家族という個に回収されてはならない。政治的であれ。個人の問題は社会問題である。実存は社会である。実存を追及すること。

・知で理であること・感情はどんな動物も表現する。が言語を使用する表現には悟性が必要。感覚の垂れ流しとそれに伴う自己満足は消滅させよ。単なる模倣や偽装建築のような偽装詩を追放せよ。知と理を明晰に活用せよ。

・個で孤・孤立を恐れてはならない。個であることを追求すれば甘ったるい孤独を突き抜けた地平に出る。安易なうわべのやさしさや癒しのようなその場しのぎは捨てよ。厳しく自我を屹立させよ。

元気です

桑原滝弥

田舎のおふくろが小さくなった。もともと小柄な人だったが、年を取り余計に小さくなった。近々実家に顔を出さなきゃな、そんなことを考えながら警官に追われている。追跡から逃げがためには、自分自身も警官隊の一員であると錯覚するにきがる。何であれ追いかけるものがあるというこ

■2008年夏、いま、詩はどこにあるか？